

非語学系学科を対象とした第二外国語としての 中国語学習における3段階ブレンディッド ラーニングの実践

趙 秀敏*, 富田 昇**, 今野 文子***, 朱 嘉琪***,
稲垣 忠**, 大河 雄一*, 三石 大****

Practice of 3-Phase Blended Learning for Chinese as a Second Foreign Language in Non-Language Departments

Xiumin ZHAO*, Noboru TOMITA**, Fumiko KONNO***, Jiaqi ZHU***,
Tadashi INAGAKI**, Yuichi OHKAWA*, Takashi MITSUISHI****

1. はじめに

近年日本の大学では、大学全入時代を迎え、学習意欲の低下や授業外の学習不足といった問題が顕著となっている⁽¹⁾⁽²⁾。しかしながら、第二外国語としての初修中国語は、その言語学的な特徴に加え、授業時間数の制約もあり、授業後の自習、とくに音声面を重視した自習が必要不可欠である。こうした課題を解決するために、われわれは、通常の対面授業、授業後のeラーニング、および次回の授業の冒頭に行う確認テストと発展学習からなる3段階学習プロセスのブレンディッドラーニングを提案している。

提案手法に基づき、2010年度T大学教養学部言語文化学科1年次の通年の実授業を対象に実施した実証実験からは、提案手法による学習意欲の向上、復習状況の改善、学習効果の向上といった効果を確認した⁽³⁾。このT大学言語文化学科（以下、T大）は言語専攻の学科であり、初修中国語の授業は、中国語学習課程の入門基礎として重要な位置を占めている。具体的には、同学科では外国語科目としての初修中国語

を週2コマ、中国語会話を1コマの計3コマを通年開設し、それら授業は主に専任教員が担当するとともに、受講者も中国語専修希望者が中心となっている。

一方、現在、日本の大学では、第二外国語受講者全体に占める中国語受講者の割合が最も高いなかで、受講者の圧倒的多数を占めるのは非語学系学科の学習者となっている。また、言語専攻の学科に対し、非語学系の学部や学科では、中国語は一般教育科目の第二外国語、選択必修科目ないしは選択科目として開設され、授業数も週に2コマないし1コマである。さらに、授業担当は非常勤講師によることが多く、また、2年次以降は非必修科目とされることが多いため、受講者数も大きく減少する傾向にある。このように、非語学系学科における中国語授業は、言語専攻の学科と比較し、その位置づけ、授業数、担当教員の構成、学習者の特性や受講動機などさまざまな面において異なり、より多くの制約がある。

これまで、本研究で提案する3段階学習プロセスによるブレンディッドラーニングの効果をT大において確認することができたが、非語学系学科の授業に

* 東北大学大学院教育情報学研究所・教育部 (Graduate School of Educational Informatics, Tohoku University)

** 東北学院大学教養学部 (Faculty of Liberal Arts, Tohoku Gakuin University)

*** 東北大学高等教育開発推進センター (Center for the Advancement of Higher Education, Tohoku University)

**** 東北大学教育情報基盤センター (Center for Information Technology in Education, Tohoku University)

受付日: 2013年4月17日; 再受付日: 2013年5月30日; 採録日: 2013年6月21日